

報 告 タ イ ト ル	『本朝水滸伝』の典拠と方法
報 告 者 所 属 名	日本文学研究専攻(国文学研究資料館)
報 告 者 氏 名	紅林健志
平成 19 年 7 月 15 日、第 27 回日本文学協会研究発表大会（於中京大学）において「『本朝水滸伝』の典拠と方法」と題して研究発表を行った、以下は、その発表内容の概略である。	
1. 『本朝水滸伝』の典拠について	
『本朝水滸伝』（建部綾足著、安永二年刊、後編は写本で伝わる）は孝謙天皇治世下を舞台にした小説であるが、その歴史的記述の典拠として、これまでは『前々太平記』の名前が挙げられていた。（寺島員章「『本朝水滸伝』典拠小考」1978）本発表では、それに対し『日本王代一覧』（林鶯峰編、寛文三年刊）の方が優位である旨を文辞の比較から通じて述べた。	
①「道祖王」の訓み	
②「石村村主」の名→「石村村主」（王・本）「石村石楯」（前）	
③安禄山についての記述	
「唐国の天皇色欲にめで給ふをこたりによりて、臣安禄山兵を集めて御代を奪はんとす。禄山もし本意遂ずは、船を東に枉て此御国をやうかゞひ候はん」（本）	
「大唐ニ安禄山乱ヲヲコシ。世ヲ奪フ由。日本ヘ聞ユルニヨリテ。安禄山本意ヲトゲズンバ。若日本ノ海上ヘヤウカゞヒ。キタルベキモ。ハカリガタシ」（王）	
「然ル頃年唐ノ賊臣安禄山両京ヲ陥レ、（中略）已ニ利ヲ失フニ於テハ必ズ外国ニ船ヲ出サン。然ラバ我西州ニ競ヒ来ンモ亦知ベカラズ。」（前）	
2. 『本朝水滸伝』における歴史的事象の描き方について	
①宇佐八幡神託事件の描き方をめぐって	
宇佐八幡神託事件の文学の描き方は、『日本後紀』の記述をもとに、以後、いくつかの要素が加えられてゆくというかたちが一般的であった。近世においては、先にあげた『王代一覧』の影響の大きさが注目される。（『王代一覧』は『道鏡法師絵詞』に依ってこの記事を書いたと考えられる。）	
『王代一覧』が託宣中の道鏡排斥の論理を「況や無道ノ者ヲヤ」と「無道」の言葉で述べ、諸書それに従うが、『本朝水滸伝』では「いかに況やすぢなきものをや」と「すぢなきもの」という言葉で表現することから、『本朝水滸伝』に〈人物の出自〉を重んじる姿勢が見出せるのではないかというのが発表者の主張。	
②恵美押勝と弓削道鏡に対する評価	
押勝と道鏡については同じ型の人物と判断するのが、近世においても一般的。（→馬琴「本朝水滸伝を読む并に批評」『本朝通紀』『前々太平記』）それに対し『本朝水滸伝』は押勝と道鏡を明確に区別して描く。大職冠以来の由緒正しい家柄の押勝と、伊予出身の素性の知れない修行者である道鏡との対立、という構図は全編を貫くものといえる。	
3. まとめ	
『王代一覧』は、日本の古代を貴人の系譜をつくりながら描いてゆく年代記であり、出自を重んじる姿勢のある『本朝水滸伝』が典拠とするにふさわしい書物といえる。また、こうした『本朝水滸伝』の姿勢を踏まえてこそ、本作品の登場人物の心情をより的確に把握することが可能となる。	